

2. 貯蓄の習慣と家計

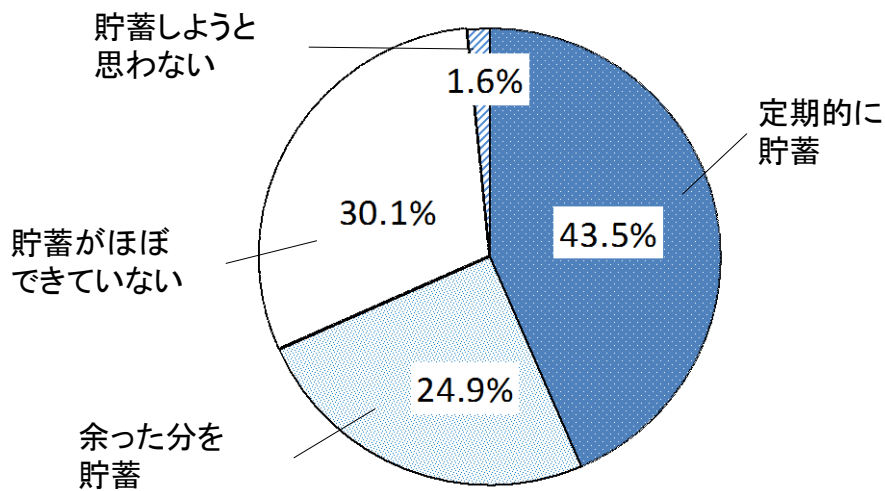
(1) 4割の世帯は定期的に貯蓄している

定期的に貯蓄を行うことの重要性や必要性は、多くの人たちが認識しているものの、その実行や継続は難しい。ここでは、20代後半から50代前半の子どもがいる女性を対象に、日ごろの貯蓄に対する取り組みについて調べた。

「収入から一定額の額を貯蓄しようとしている」のかをたずねた結果、「定期的に貯蓄」していると回答した人の割合は43.5%であった。一方で、30.1%の人たちは「貯蓄がほぼできていない」と回答している。

半数近くの人たちが定期的な貯蓄を心がけているが、貯蓄が十分にできていない人たちも、全体の3割と少なくない割合を占めている。

図表 2-1 貯蓄の取り組み状況



N=945

(2) 定期的な貯蓄を心がけている世帯は、家計における貯蓄の割合が大きい

図表 2-2 には、貯蓄の取り組み状況別に貯蓄額（月額、中央値）と貯蓄率*を示した。月あたりの貯蓄額をみると、「定期的に貯蓄」では 6 万 9 千円、「余った分を貯蓄」で 4 万 9 千円、「貯蓄がほぼできていない」で 2 万 5 千円となっている。定期的に貯蓄している人は、貯蓄できていない人よりも、実際に貯蓄している金額が多くなっている。

貯蓄率についてみると、「定期的に貯蓄」では 17.8%、「貯蓄がほぼできていない」では 7.0%となっていた。つまり、定期的に貯蓄している人は、できない人に比べて貯蓄額が多いだけでなく、家計の中で貯蓄が占める割合でも、その値が大きいことがわかる。定期的に一定額の貯蓄を確保するために、毎月の収入から貯蓄分を捻出している人が少ないようである。

図表 2-2 貯蓄の取り組み状況別 貯蓄額、貯蓄率（月あたり）

	定期的に貯蓄	余った分を貯蓄	貯蓄がほぼできていない	貯蓄しようとは思わない
貯蓄額	6万9千円	4万9千円	2万5千円	0円
貯蓄率	17.8%	13.2%	7.0%	0.0%

N=945

*貯蓄率 = 貯蓄 / (支出 + 貯蓄 + ローン返済)

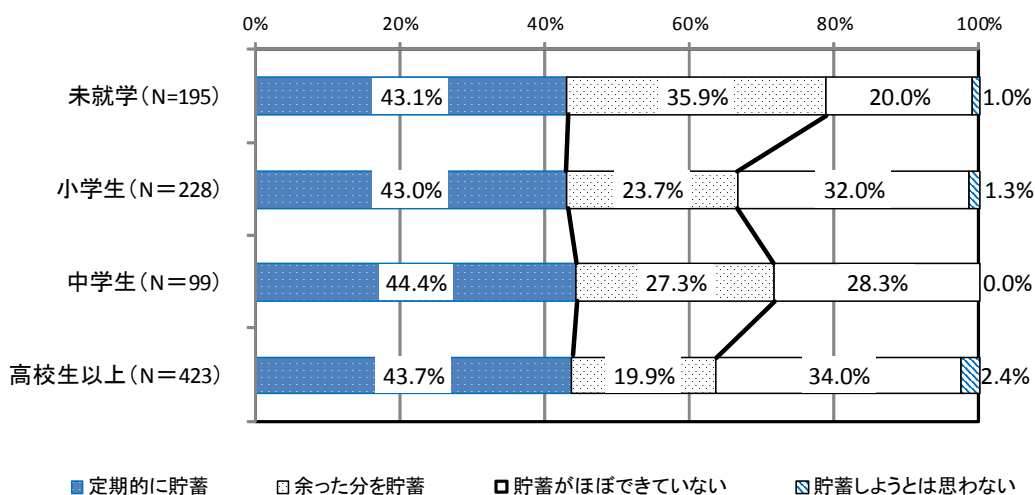
(3) 子どもの成長に伴い、貯蓄にまわす余裕がなくなっていく？

子どもが成長するにつれ、教育費の上昇やマイホームの購入など支出が増え、貯蓄の確保が困難になっていくことが予想される。そこで、子どものいる世帯を対象に長子の学齢ごとに貯蓄の取り組み状況を比較してみた（図表 2-3）。

「定期的に貯蓄」の割合は、長子の学齢にかかわらずほぼ一定の 40% 台である。その一方で、「余った分を貯蓄」の割合は、長子が未就学児の世帯では 36% だが、子どもが就学すると低下し、高校生以上の場合では 20% と、未就学児の世帯と比べ 10 ポイント以上も減少している。それと並行して、「貯蓄ができていない」の割合は、学齢が上がるにつれて増加しており、未就学児では 20% であったが、高校生以上では 10 ポイント以上も高い 34% にまで達している。

以上の結果は、子どもの成長に伴い、月々の家計において貯蓄にまわす余裕がなくなっていく傾向があることを示している。ただ、それと同時に、子どもが大きくなっても毎月の定期的な貯蓄ができていない人が 4 割以上いて、その割合は子どもの学齢によって変わっていないこともわかった。子どもの成長に伴い支出が増加し、家計の余裕が少なくなっていく世帯が増えるにもかかわらず、定期的な貯蓄の習慣を保持できている人も、少なからずいるようである。

図表 2-3 長子の学齢別 貯蓄の取り組み状況



(4) 「貯蓄体質」の家計になるには、子どもが小さい頃からの継続が大事？

子どもが成長しても定期的に貯蓄できている人たちは、子どもが小さい頃に、どのような支出・貯蓄を行っていたのだろうか。ここでは、家計の“子どものため”のお金の使い方に着目する。長子が小学生の頃¹の「子どもへの支出」(塾・習い事や玩具等の費用)と「子どものための貯蓄」の間のバランスが、長子が高校生以上になった現時点の貯蓄とどのような関係にあるかを、同一の対象者について調べてみた。支出や貯蓄の額は世帯収入や子どもの人数等に左右されることを考慮し、次の2つのグループに分けて考える。

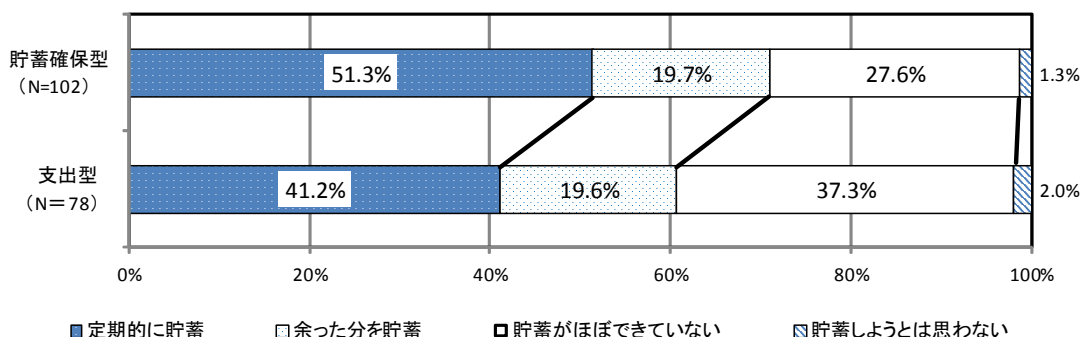
「貯蓄確保型」： 子どものための貯蓄額 > 子どもへの支出額の5割

「支出型」： 子どものための貯蓄額 < 子どもへの支出額の5割

図表 2-4 は、この2つのグループの間で、長子が成長した現時点での貯蓄の実行状況を比較したものである。「貯蓄確保型」は「支出型」よりも、「定期的に貯蓄」の割合が大きく(51.3%と41.2%)、「貯蓄ができていない」の割合が小さい(27.6%と37.3%)。つまり、長子が小学生の頃に、子どもへの貯蓄を確保していた人ほど、様々な支出が増えている現時点でも、定期的な貯蓄をしている傾向にある。

将来の教育費などの支出を見据え、子どもが小さい時から定期的に貯蓄をしておくことで、子どもが成長してからの支出に備えられる。また、いざ貯蓄しようと思っても一朝一夕にはいかず、長年にわたる貯蓄の習慣化や、家計運営の熟練も大切なようである。

図表 2-4 長子が小学生の時の支出タイプと、現在の貯蓄実行状況との関係



¹ 10年前の2003年の値を用いた。